

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350776

研究課題名(和文)メディアスポーツによる地域の社会関係の再編過程に関する社会学的実証研究

研究課題名(英文) Sociological empirical research on reorganization process of local social relations by media sports

研究代表者

橋本 政晴 (Hashimoto, Masaharu)

信州大学・学術研究院教育学系・講師

研究者番号：90350181

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は茨城県鹿嶋市を事例として、プロサッカーチームの地域的展開とメガスポーツイベントの開催が、当該地域で生活を営む地域住民たちが維持してきた地域的な社会関係の再編過程を探ることを目的としている。

同市T地区の社会関係は、居住と世代をベースにした<互いの家族の顔の見える社会関係>として維持されてきた。他方、スタジアムに集うことをベースにした社会関係は、居住・家族・職業などの社会的属性を不問にしたままの<半匿名性の社会関係>として形成されていた。両者は互いに抵触することはなく、メディアスポーツは歴史的に維持されてきた地域生活から遊離したものであったと結論付けることができる。

研究成果の概要(英文)：This study is a case study of Kashima city in Ibaraki prefecture, the regional development of the professional football team and the holding of the mega sports event are to explore the process of restructuring the regional social relations maintained by the local residents living in the area. It is an object.

The social relationship in the city T area has been maintained as a "social relationship in which the faces of mutual families are visible" based on residence and generation. On the other hand, the social relationship based on gathering at the stadium was formed as a <semi-anonymous social relationship> with the social attributes such as residence, family and occupation in question. It can be concluded that the two did not interfere with each other and that media sports were free from the historically maintained community life.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：サッカー 地域生活 半匿名性

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、<スポーツとメディア>というテーマで、スポーツ社会学の研究を進めてきた。国内外における研究のレビュー(橋本政晴「メディアスポーツ研究の経緯」『現代メディアスポーツ論』所収)を通じて明らかにされた学術的な課題は、メディアに媒介されたスポーツが、「受け手」のレベルでどのように受容されているのかということであった。すなわち、言説分析という手法を用いてメディアスポーツのイデオロギー性を暴き出すにせよ(阿部『スポーツの魅力/メディアの誘惑』、森田『メディアスポーツ解体』など)、儀礼理論を用いてメディアスポーツの祝祭性を浮かび上がらせるにせよ(ダヤーン&カツ『メディアイベント』、マカルーン「近代社会におけるオリンピックとスペクタクル理論」など)、メディアスポーツを現実に享受している「受け手の受容過程」の解明こそが、かかるメディアスポーツのもつ広範かつ重要な社会性を解明することになるのだと。

こうした問題設定は、私たちの日常生活に浸透している<スポーツとメディア>の政治性を暴き出すことを目的とした、我が国におけるスポーツの「全域的」な展開過程として位置づけることができる。しかしながら、この展開過程は、当該のスポーツに関わりをもつ人びと(選手・スタッフ・観客など)や場所(スタジアム・鉄道・道路)を抜きにしては成立しえない。すなわち、スポーツの「全域的」な展開過程は、スポーツの「局地的」な展開過程の集積として考える必要があるのだ。

そこで、本研究は次のような発想のもとに構想している。スポーツの「局地的」な展開過程は、各種スポーツの受け皿となる各地域で生活を営む地域住民たちによる生活再編のプロセスこそが、当該地域における「ボトムアップ」的な<スポーツをめぐる問題>として学術的に探究することの重要性があるのだと。

## 2. 研究の目的

本研究は、茨城県鹿嶋市を事例として、プロスポーツチームの諸活動とメガスポーツイベントとしてのW杯の開催が、当該地域の住民たちによって維持・形成されてきた社会関係をどのように再編しているのかを探ることを目的としている。スポーツ社会学におけるプロスポーツチームやメガスポーツイベントをめぐる研究の多くは、メディアスポーツの言説分析を通じたアイデンティティやローカリティをめぐる政治学、社会

的・経済的な効果に着目した地域活性化論、スポーツの普及・強化をベースにしたスポーツ振興論を議論の中心に据えてきたが、本研究では、「全域的・トップダウン的」なサッカーの地域振興に対する、「局地的・ボトムアップ的」な地域住民による対応という意味で、生活レベルにおける社会関係の再編のプロセスに着目する。

## 3. 研究の方法

鹿嶋市におけるメディアスポーツを通じたサッカー振興の論理を以上の項目をもとに、資料を収集し、聞き取り調査を行った。

- (1)在京テレビ局、全国紙、地方紙(茨城新聞)に加えてインターネットなどを通じて、鹿嶋市が「サッカーの町」としてどのように位置づけられているのか。
- (2)鹿嶋市や地元企業を中心に、行政や企業が鹿嶋市の現在および将来を、「サッカーの町」としてどのように位置づけようとしているのか。
- (3)JFA、茨城県サッカー協会、鹿嶋市サッカー協会といった国内のサッカー組織が、鹿嶋市を「サッカーの町」としてどのように位置づけようとしているのか。

以上の資料収集および聞き取り調査をもとにして、諸々の諸機関・団体・組織によって、鹿嶋市がいかにして「サッカーの町・カシマ」として言説化されているのかを全体的・網羅的に明らかにすることに焦点をあてる。それは、<メディアスポーツによるサッカーの地域的振興の論理>の抽出を試みることでもある。

次に、鹿嶋市T地区における社会関係の再編の論理について以下の項目をもとに、資料を収集し、聞き取り調査を行った。

- (1)1970年代の混住化以降、自治会はどのように組織化されているのか。
- (2)現在、自治会の活動はどのように行われているのか。
- (3)同地区における自治会活動以外に、当該地区の住民たちはどのような地域的活動を行っているのか。

以上の項目をもとにして、資料収集や聞き取り調査を行い、<社会関係の再編の論理>の抽出を目指した。

ここまでの社会調査をもとにして、以下の分析モデルをつくり上げた。

<メディアスポーツによるサッカー振興

#### の論理>の抽出

収集した資料や聞き取り調査から、メディアスポーツを通じたサッカーの地域的振興の論理を抽出し、「サッカーの町・カシマ」がどのような言説のもとに定位しているのかを探る。

#### 鹿嶋市T地区における自治活動の諸相

聞き取り調査を実施したデータおよび補足調査のデータをもとに、同地区における自治活動およびその他の住民による諸活動について纏め、どのような社会関係が編成されているのかを明らかにする。その際、1970年代の鹿島コンビナート開発以降に、同地区が混住化を余儀なくされ、それ以降、どのように自治活動を行ってきたのかにも着目する。

#### <メディアスポーツによる社会関係の再編の論理>の抽出

鹿嶋市T地区における自治活動の諸相から、同地区では社会関係の再編成がどのように行われてきたのかについて、その論理を抽出する。ここでは、自治活動の論理とサッカー振興の論理との関連性だけではなく、その解離性についても着目することによって、<メディアスポーツによる社会関係の再編成>のプロセスを、より深みをもって考察したい。

#### 「メディアスポーツと社会関係の再編」をめぐる社会学

～ の作業をもとにして、「メディアスポーツによる社会関係の再編」のプロセスを社会的に考察を行う。その際、地域生活を存続させていく論理の解明を課題としてきた、社会学における生活論の議論に学ぶことで、実証的な解明を試みる。また、こうして導き出された議論を、これまでのメディアスポーツ論の研究成果に関連づけることで、「メディアスポーツと社会関係の再編」について纏め上げる。

#### 4. 研究成果

プロスポーツチームやスポーツイベントに対する地域住民たちによる対応の諸相から、次のことが明らかになった。

第一に、住民たちにとってサッカーは、決して身近なスポーツではなく、言説によって凝り固められたメディアスポーツであり、メディアイベントであった。スタジアムに通う住民たちは、そうした住民よりも近くでサッカーを経験してはいるが、「熱い」サッカーを諦観する住民たちの暮らしぶりにも寄り添っている。メディアスポーツ/メディアイベントにおける受け手の能動性/受動性について語ろうとすることは、彼らの経験を単純化・抽象化しているという問題が明示化され

た。

第二に、住民たちがサッカーに対して諦観の姿勢を固持していたのは、自らの暮らしをつつがなく送っていきたいがためのものだった。加えて、そうした地域の生活に配慮しつつ、「もの静か」な暮らしぶりに近づこうとするスタジアムに通う住民たちの姿は、他方のサポーターとしての「過激な」振る舞いとは対照的であった。スタジアムに通う住民たちは、地域の生活者でもある。両者が繋がりがなく癒合している住民たちの身体性。それは、「地域」の歴史的な暮らしぶりが、かろうじてつなぎとめているのかもしれない。

第三に、スタジアムに通う住民たちは、スタジアムに足を踏み入ると過激になり、ゴール裏を纏め上げることが求められる。鹿島に興味を注ぐマスコミや研究者に対しても、「地元サポーターの代表」としての役割が期待される。ところが共に地域生活を営んでいく人物としての彼らに求められているのは、「つつがなく暮らしていく」ために地域に貢献することだった。だからこそスタジアムでは「ガラ悪く」しているのだが、地域生活者としての彼は、自身のこれまでの活動に苦悩し、「地域」に対して控え目に振る舞うのである。それだけ彼らにとって「地域」の共同生活とは揺るぎのないものなのだ。

鹿嶋市においては地域生活とは無関係なままにサッカーが展開してきた。しかしそこで生活を営んできたスタジアムの住人たちは「地域」とかかわらざるを得ない。スポーツ社会学の問いは、こうした生活の事実から出発することが求められている。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)  
取得状況(計0件)

〔その他〕  
特になし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
橋本 政晴 (Hashimoto, MASAHARU)

信州大学・学術研究院教育学系・講師  
研究者番号：90350181

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし

(4)研究協力者  
なし

